

一神教学際研究センター設立記念講演会

「日本の精神性と一神教世界」

日 時／2003年10月11日(土) 午後3時-6時
会 場／同志社大学 今出川キャンパス 神学館礼拝堂
講 師／土井 利忠(ソニー株式会社上席常務、AIBO開発責任者)
板垣 雄三(東京大学名誉教授)
司 会／小原 克博(同志社大学神学研究科助教授)

講演の概要

本公演会は、一神教学際研究センターの設立記念プログラムとして企画された。センターの基盤でもある日本社会独自の精神性と宗教というものについて、二人の研究者の分析を通して一般の方と共に確認し再考する目的がある。

講師の土井利忠氏は、アイボの開発者として著名であるが、量子力学などの最先端科学と、心理学および宗教学の接点から精神世界にも造詣が深い。また、一方の板垣雄三氏は、日本における中東・イスラーム研究の第一人者である。

スケジュール

3:00～3:10 森 孝一 一神教学際研究センターについて
3:10～4:10 土井 利忠 「社会の進化と宗教性」
4:10～4:30 質疑応答
4:30～4:40 休憩
4:40～5:40 板垣 雄三 「日本人のイスラーム観 ― 一神教とは肌が合わないか」
5:40～6:00 質疑応答



「社会の進化と宗教性」

ソニー株式会社上席常務、AIBO開発責任者
土井 利忠



皆さんこんにちは。ご紹介いただきましたように、私はどちらかという根っからのエンジニアであり、コンパクトディスクやアイボを開発したり、その間ワークステーションを作ったり、そちらの方でどちらかという騒がせてきた方です。本日は全く場違いな所に来ているということも言えるかも知れません。

ご紹介にありましたように天外伺朗というペンネームで本を結構書いています。その中で私が書いてきましたのは精神世界というか、サイエンスの中でも量子力学と深層心理学と宗教が言っていることが、実はものすごく共通であるというところを中心に沢山の本を書いてまいりました。特に今日の話の中心になりますのが先ほど紹介いただいた2冊です。『心の時代を読み解く』は対談本ですが、宗教学者として有名な山折哲雄さん、理論物理学者ですが美意識のようなものを中心に、あるいはパイプオルガンの演奏と大学の講義を一緒にやっておられる大変有名な佐治晴夫先生、日本の哲学界の重鎮であると同時にユング心理学やいわゆる超心理学とか気の科学に大変造詣の深い湯浅泰雄先生、トランス・パーソナル心理学を日本に紹介しご自身もセラピストとして大活躍された吉福伸逸さんという、4名の日本を代表する知の巨人と私が対談したという本です。

対談の一番のテーマが宗教性であり、ここで言っている宗教性というのは既存の宗教から見た宗教性とは少し違う話です。どちらかと言うと深層心理学者のユングが言っているように、あらゆる人間は既存の宗教と無関係に心の奥底に宗教性を持

っている、要するに宗教性というのは人間の基本だという話があるわけです。これは心理学の方ではよく知られていることです。従って宗教があるから宗教性があるのではなくて、人間というのはそもそも宗教性がある、その宗教性を色々な形で分かり易く表現したものが逆に言うと既存の宗教である。そういう観点に立つと、先ほども話が出ましたが、近代文明社会というものは逆に言うと宗教性を切り捨ててきたわけで、そこに非常に大きな問題、ひずみが沢山出てきている要因が見られるわけです。そういうことをこの4人の知の巨人と色々突っ込んだという、少し難しいところもありますが、そういう本です。

既存の宗教、例えばキリスト教、イスラーム、仏教といういわゆる世界宗教に対して、この本はかなり批判的です。私が批判的と言うより、4人の先生方がそれぞれ皆んな批判的である。そろそろそういう世界宗教の役割が、社会全体としては終わりに近づいているのではないかという意見が非常に濃厚に出ている本です。とは言うものの、もちろん、先ほどの森先生のお話にありましたように、今の世界情勢から見るとそうは言っておられない。従ってそこを何とかもう少し研究しないといけないということも事実です。その2つの話が相反する話ではなくて、両方ともその通りなのではないかと考えております。

実はこの4名の先生方と対談させていただいた時に、ふとアイデアが湧きました。と言うのは、これから世の中がどうなるかということには皆んな関心

を持っているわけですね。一体今の社会がこの次にどういう具合に移っていくのだろうか。今までだと、私はこう思うというような単純な予測の話が多かったのですが、それを学問的にきちんと予測できるということが分かりました。その時の基礎になる学問がトランス・パーソナル心理学という非常に新しい学問です。これは大変すごい学問だと思います。そのトランス・パーソナル心理学をきちんと適用していくと、今我々が非常に煮詰まってしまったこの近代文明社会が次にどういう社会に移り変わっていくかということが、かなり学問的にきちんと分かる。この次の社会だけではなく、その次の社会、その次の社会とあともう3つぐらい先の社会まで、この本では予測しています。その時も基本的には、今から次の社会に移り変わる一番の要因がやはり宗教性ということになるのではないかと思います。

これはご紹介までですが、ちょうど今日ぐらいから書店に並んでいると思いますが『イーグルに聞け』という本をもう一冊書きました。これは心理学者とか、カウンセラーである江藤先生という有名な先生と私の共著です。こちらもぐっと変ってネイティブ・アメリカンの文化やフィロソフィーというものについて書いています。実は私もネイティブ・アメリカンの長老から聖なるパイプをいただいてパイプホルダーになっています。つまり、ネイティブ・アメリカンの社会の中だといわゆるパイプセレモニーという基本的な祈りのセレモニーをやってもよいというお許しを得ているわけで、キリスト教でいう司祭に相当すると思います。江藤先生はやはり心理学をずっとやってきて、ネイティブ・アメリカンのフィロソフィーを勉強しなくてはいけないということで、ナヴァホ族の所で8カ月ほど一緒に暮らすという経験をこの本にまとめています。こちらの方は一神教のように非常に洗練された宗教とは全く違う、非常に原始的なネイティブ・アメリカンの宗教観が一体どういう意味を持っているかということが中心です。最後にCDがついていて、これはネイティブ・アメリカンの長

老の女性がお祈りをしているCDです。ネイティブ・アメリカンの祈りというのはすごいのですね。聞いてみると大体、涙が出ます。色々なセレモニーでパイプセレモニーというのが一番中心なのですが、ネイティブ・アメリカンのメディスンマンという長老たちがお祈りを始めますと、大体みんな泣いてしまいます。祈りの言葉が決まっているわけではなく、全部即興です。でも大体、涙が出てくる。祈っている方も大体泣いてしまいます。その位、感情のこもった祈りを彼らはやっています。

実はこれはマリオン・ヤングバードというメディスンウーマンの祈りですが、これをとったのはスタジオでとりました。音楽評論家の湯川れい子が企画してとったのですが、マリオン・ヤングバードも湯川れい子も涙でグシャグシャになって録音した。たまたまそのバックで私がケーナという南米の笛を吹きました。これを後で聞いてみて、何で私がこんな演奏をしているのだという演奏になっています。本当はこんなに上手ではないのですが、この時は何が乗り移ったのか分かりませんが大変な演奏がとれてしまったということがあります。そういうCDがついて1800円で、大変お買い得になっています。

社会の進化ということですが、今世の中が大変混迷している。ちょうど今、総選挙がありますが政治もグジャグジャ、経済界もグジャグジャ、建設業界は息も絶えだえ、普通の一般的な産業は中国や韓国にどんどんやられてしまっている。最先端のバイオやITネットワークはアメリカにやられている。この日本の社会は一体どうなってしまっているのか。景気対策ということがよく言われますが、実は日本経済がおかしくなってきた1992年、当時は宮沢内閣で、2000年は森内閣の頃、足掛け10年ありますがその間に景気浮揚に使ったお金は何と139兆円なのです。ですから政府がさぼっていたわけではない。むしろ今までのケインズ経済学が破綻しているのです。世の中が物凄い勢いで変ってきて、今までの経済学も社会学も産業に対する考え方も、そ



ういものが一切合切通用しなくなってきた。大変な時代になってきたというのが非常に正直なところ。その辺の話はこの『深美意識の時代へ』に書いてあります。

結局、何が起きているか。そういう社会の変革というものは人類社会の中で何百年に1回、必ず起きています。今はまさに、次の大きなトランジションに我々は向かっている、あるいは真っ只中かも知れませんが。こういうトランジション、変革というのは真っ只中にいると見えないのです。今から30年くらい経って振り返るとよく見えると思います。ただ我々はその真っ只中にいるから見えない。どのくらい大きな変革かと言うと、かつて中世から近代に移ったのと同じくらい大きな変革だと私は確信しています。その昔、中世がある。大体300年くらい前からそれが近代に移り変わっていく。それから大体2001年の同時多発テロというものが非常に大きなきっかけと後世の歴史家は多分捉えるでしょうが、その2001年くらいからその次の社会に移り始めている。私はかなりクリアにこういうことが言えるのではないかと思います。

その移行する時に、宗教性というものが非常に重要な意味を持っています。この宗教性と非常に似た意味で「深美意識」という言葉を使っています。これは造語です。そういう言葉が世の中にあるわけではなく造語で、深いという字をつけたわけ。本当はギリシャ哲学で言う真善美という3つの要素がありますが、真と善と美というものは全部一つのことだということが『心の時代を読み解く』の中で、色々な先生方から話が出ています。その一つになったものを宗教性と言えば宗教性と言えませんが、それを「深美意識」という言葉で言い換えています。従ってそれは真善美のコアですから、夕焼けがすごく綺麗だ、あるいは花がすごく綺麗だという美意識ともう少し高度な美意識、例えば賢人が説くような慎ましく質素な生き方が美しいと感じる美意識は同じものなのですが、一般的に美意識と

言うとは表面的な審美感だけを表わすことが多いので、わざわざ深いという字をつけているのです。

宗教性あるいは言い換えて深美意識という概念が、次の世の中に移り変わる時の非常に大きな要因になるだろう。どういうことかと言うと、一番分かり易い話は、これは少し差し支えがあるかも知れませんが、鈴木宗男議員です。刑務所から出てきてまた立候補するとかしないとか色々取り沙汰されています。今、現時点で鈴木宗男議員に憧れる人はあまりいないと思います。いたら少しおかしいかも知れませんが。しかし逮捕される前の鈴木宗男議員というのはどうだったか、少し想像してほしいのです。まずお金は一杯持っている。そして橋本派の次期リーダーとして大変有望な国会議員でした。権力は物凄く持っている。外務省も彼が「コラッ」と言うと震え上がるくらいの、物凄い力を持っていた。「ムネオハウス」を作ったり、色々な大きな仕事をしている。大勢の人が彼に従っている。権力もある、金もある。いわゆる近代文明社会の成功者の典型的なパターンなのです。

今この社会を見ていると、社会の上層部というのは大体そういう人が占めている。私もそうかも知れませんが会社の上層部、あるいは国会議員の中でも大体同じような人が占めています。ある意味ではアグレッシブという言葉を使いますが、非常に一生懸命に働き、人を蹴落として色々なことをしてのし上がっていった人です。エゴの肥大とかエゴの膨張とかいうことをよく言いますが、非常にエゴが強く、そのエゴを発揮して、エゴがある程度暴走気味になった人が社会の上層部を占めている。これが今の近代社会の特色なのです。そういう人を見ると、まず誰でも羨ましいという気持ちが起きると思います。羨ましいという気持ちが起きない人は、結構やせ我慢をしているのではないかな。誰でもお金や権力が欲しいし、ああいう具合に出来たらいいなという羨ましい気持ちがある。でも何か美しくないなという感じも同時に起きる。何か美しく

ないなという感覚のもとが、この深美意識です。ですから今の社会というのは、何となく美しくないという人たちが上の方にドドッというものが、近代文明社会なのです。それは基本的にエゴが肥大している、あるいは暴走している人が多いわけです。今の近代文明社会は、このエゴの暴走、エゴの肥大というものを社会の推進力にしている社会なのです。とんでもないと思うかも知れませんが、これは事実だから仕方がない。我々会社にいる人間というのははともかく一生懸命働けと、一生懸命に働いて成果を上げれば給料を上げてやるぞ、地位を上げるぞという、一つの力学の中で働いているわけです。会社間の競争もそうです。全部が一人ひとりエゴを追求しなさいと。貴方のエゴを追求しなさい、あるいは貴方の組織のエゴを追求しなさいと。組織のエゴを追求する、個人のエゴを追求する、その追求するエネルギーが社会全体を活性化している。そういう社会になっているわけです。

ですからある意味では、この宗教性とか深美意識というものとエゴの追求というものが相反することなのです。正反対の極にある「モチベーション・衝動」というわけです。従って日本の社会だけでなく近代文明社会にいるあらゆる人というのは、深美意識とエゴの追求の葛藤の中で生きている。これはまず間違いありません。人によって物凄くエゴがひどい人がいますし、人によっては深美意識がかなり優勢になっている。しかしながら、あらゆる人がその二つの衝動の葛藤の中で生きているということは、まず間違いなくことなのです。その中でどちらかというエゴが肥大している人が逆に言うと上層部に来ているという、そういう構造を持っています。

ここまでは皆さんに多分納得していただけたと思うのですが、ここから先は少し学問的な話になります。トランス・パーソナル心理学という学問の中で、トランス・パーソナル心理学者の非常に有名な一人にケン・ウィルバーという人がいます。本当は意識の進化だけではないのですが、この人は人間の意

識の進化のようなものを学問的に大変きちんと調べた人です。ケン・ウィルバーの説が正しいとすると、今我々は皆んな深美意識とエゴの追求の葛藤の中で生きているわけですが、人類が進化するとともに次第に深美意識が優勢になってくることが、ある程度学問的に言えるわけです。別の言い方をすると、宗教性が非常に強くなってくるといいう言い方が出来るかも知れません。それが自然な人類の進化だということが言えるだろう。そうだとすると、その次の社会がこうなりますよということは割合きちんと言えるわけです。

逆に言うと、中世は宗教が社会の規範だったわけですね。ところが宗教が抑圧的に社会を支配したという言い方が出来ると思います。そのために大変に色々なことがありました。例えば一番大きな分かり易い話としては魔女狩りがありました。魔女狩りで一体何人死んだかということはずっと分かりませんが、数十万人と言う人と数百万人と言う人がいますが、少なく見積もっても500年間ほどあったわけですね。私が見たわけではありませんが、博物館へ行くと魔女狩りに使った針が展示されているそうです。これは刺すと先が引っ込んでしまいます。魔女審判人というものがいて、その針を刺すと先が引っ込むから血が出ないわけです。手品でよく使うものです。針を刺しても血が出ない、これは魔女だと判定する。魔女だと判定すると、判定人はお金を貰えるわけで、どんどん魔女を作ってしまうのです。そういうことがどんどん行われ、宗教は非常に抑圧的に支配した。

それが近代になり、皆さんよくご承知のようにここは逆に理性が中心になっています。あるいは科学的合理性という言い方が出来るかも知れません。科学的合理性というものが社会の規範になっている。科学的合理性を中心にする、宗教的にドグマティックにやみくもに何かするということは一応少なくなるだろう。ないわけではないが、比較的少なくなるだろう。本当に実証されたことだけを真



実と認めるということが中心になっています。それが今の我々の社会なのです。そうすると何が良いか。抑圧的な宗教の支配から脱することが出来た。もう一つは近代科学というものが起きてきて、それまでの宗教的な宇宙観は否定されていきました。理性、科学的合理性中心ということで今の社会がどんどんそちらに向かって発展していった。

しかしこれが基本的にエゴの肥大を招いているわけです。逆に言うと中世の方は宗教がありましたから、宗教的・形而上的な価値観とエゴの追求のようなものがあるバランスを保つことが出来た。ところがこちらに来ますと、形而上的な価値観というのが宗教とともにある意味では否定されてしまい、社会の中でそういうバランスをとる仕組みがなくなってきた。そして人々がどんどんエゴを暴走させる。もちろんこれにはそういう必然があり、エゴを肥大させエゴの追求を推進力にして社会経済が発展し、軍事力が盛んになった国でなければ生きていけない時代があったわけです。それをやらないと植民地にされてしまうという時代がありました。ですから皆んなが競ってそちらの方向に行きました。それが上手くいった国が今、近代文明国家で、日本もその一つです。

日本も危ない所で、明治維新で舵を切り、近代文明化を進めました。皆んなもエゴを追求しろということで産業経済が発展し、軍事力も何とかあるところまで行って植民地にならなくてすんだということが言えるのではないかと思います。エゴの追求が良いか悪いかということを行っているのではなく、現象としてそのような現象が見られるということです。イスラーム原理主義とアメリカの戦いになると、丁度この二つの中世的な価値観と近代的なエゴの追求の戦いという見方も可能です。ですからイスラーム原理主義をすごい勢いで叩く人がおられますが、逆に言うと彼らから見れば、アメリカないし日本が進めている近代文明化ということが耐えられないのは明らかなのです。これは宗教的な価値観

と相反するわけです。皆んなエゴを追求しましょうという価値観なのですから。そういうところで、ある意味では近代文明を敵と見る見方は当然出てくるわけです。ここで形而上的な価値観がいきなりターンダウンされて、エゴの追求が社会の推進力になっているのが今の日本でありアメリカでありヨーロッパです。少なくとも200年くらいは経っていますから、我々はそれを当たり前と思っています。

しかしながらよくよく考えると、もう一つの宗教性を中心にした価値観からするとそれは大変おかしなことです。逆に言うとエゴの追求、エゴの暴走が物凄い勢いで社会を支配し、それが煮詰まっていちもさっちもいなくなったのが今の社会の混迷だという見方も出来ます。では中世は今より良い世界だったかという、そんなことはないわけで、暗黒の中世と言われるようにやはり大変抑圧的だった。なぜ抑圧的になったのか、魔女狩りを例にお話します。魔女狩りには色々な人が関わりましたが、やはり聖職者が一番その中心になった。聖職者はやはり自分が良い人でなくてはならない。他の人からも良い人であると思われたいし、自分自身も良い人であると思ひ込みたい。その聖職者としての役割のようなものを理性で固めていくわけです。それを「ペルソナ」と言います。

ペルソナとは心理学用語で「仮面」という意味です。ペルソナを持つこと自体がおかしいのではなく、ペルソナは必要なのです。誰でも複数のペルソナを使い分けている。例えば会社ですと部長のペルソナを持っていたり、家に帰るとお父さんのペルソナを持ち、夫としてのペルソナを持ち、ゴルフに行くとゴルフプレーヤーとしてのペルソナを持つ。社会的に健全なペルソナをきちんと作り、それで自分を規制するということは、必要なことで非常に健全なことなのです。もちろん中世の聖職者もそれをしていた。ところがこれがあまりにも強いと、自分の好ましくない側面とかあるいは自分が意識する前に抑圧してしまった側面の部分人格を、意識の底に押し込

めてしまうわけです。それを「シャドー・影」と言います。これも別に不健全な話ではなくて、シャドーは誰でも持っています。シャドーを持っていない人は一人もいない。特にフロイトやユングの辺りですと、ペルソナとシャドーの葛藤から精神病を治療する。シャドーを上手く見つけ出して精神病を治療するという方法を使いますから、そういうことをしている人の中にはシャドーを病的だと決め付ける人が多いのですが、私はそれは全く嘘だと思います。もちろん、たまたま病的になっている人の場合はそこをいじることによって病気から脱出することが出来るかも知れない。しかし健全な人も全員シャドーを持っています。シャドーを持たない生き方というのは、人間で肉体を持っている限りまず無理です。ただペルソナが非常に強力だと、シャドーも非常に強力になってしまいます。そうすると何が起きるか。自分ではシャドーはあってならないもの、シャドーの存在自体も自分では気が付かないわけです。シャドーを抑圧したこと自体、自分でも気が付いていない。自分で気が付いていないそのシャドーから、沸々と色々な衝動が湧き上がってくるわけです。あってはいけない衝動が湧き上がってくる。そうすると非常に不快感があります。その不快感をどうするかというと、この衝動はアイツの衝動だと、要するに他人の衝動だと勘違いする。これを「プロジェクション・投影」と言います。自分のシャドーからの衝動を他人に投影してしまう。そうすると元々嫌悪感を持っていた部分人格、おまけにシャドーを認めるということが若しあるとすると、それは自分の自己概念の崩壊を意味するわけです。これは死と同じ恐怖を伴います。シャドーを投影すると、その恐怖感と嫌悪感を一緒に他人に投影してしまう。そしてその他人に対して戦いを挑むということが始まるのです。

例えば聖職者の場合、自分の不快なことを解消しようとする、邪悪の根源である悪魔と結んでいる魔女を見つけてきて、魔女を抹殺すると不快感から逃れられるのではないかという錯覚をしてしま

います。今、心理学では魔女狩りがこういうメカニズムで起きているというのは一応定説になっていますが、それでどんどん殺してしまうわけです。しかし本当は自分の心の中で起きていることであり、幾ら魔女を殺しても何の解決にもならないのです。何十万人か何百万人かが虐殺されて、それが何百年も続いてしまったということです。

例えば9・11の同時多発テロも、テロを企画した人たちというのは全く同じことをやっているわけです。今の諸悪の根源はアメリカである、アメリカに対して攻撃を仕掛け、アメリカをやっつけると解消できるという、シャドーのプロジェクションをやっているのです。9・11の後、アメリカはアフガン攻撃をしました。その時に物凄い勢いでアメリカは団結しました。同じことなのです。結局テロリストが、アイツ等が悪いのだと、アイツ等がアメリカを攻撃し近代文明に挑戦してきた、アイツ等さえやっつければ何とかかなるということで、アメリカ中が物凄い結束をしました。そしてアフガン攻撃を行った。

今、魔女狩りとテロという非常に極端な二つのお話をしましたが、よくよく見ると我々も日常生活の中でしょっちゅうそれをやっているわけです。要するに人類始まって以来、シャドーのプロジェクションをしているのです。魔女狩りや同時多発テロ、あるいはアフガン攻撃が特殊なものではなく、我々全員がこれをやっています。立派なリーダーと言えるような人は、マネジメントに必ずこれを使います。ソニーでプロジェクトを起こした時に、プロジェクトを上手くやるコツがあり、これは松下がやっているぞと言うのです。松下に先を越されてはまずいぞと、それでみんなが燃えるわけです。これはもうプロジェクションです。ですから、あらゆる所であらゆる人がシャドーのプロジェクションをやっています。紛争のもとというのは、全てシャドーのプロジェクションと言ってもよいくらいです。

では特色はなにか。一番目、自分で好ましいと思っているペルソナを自分の側にして、好ましくな



いと思っている自分の側面をシャドーとしてそれを他人に投影している。おまけに嫌悪感と恐怖感と一緒に投影している。常に自分が正義で相手が悪になっています。あらゆる戦いというものは、そういう構造になる仕組みを持っています。二番目、これはプロジェクションを起こして戦っている時だけ安定します。戦っている時には、自分の不快感はアイツをやっつければ解消するという期待感があります。その期待感で安定するわけです。一人のリーダーがそういうプロジェクションによる戦いをするとみんなが集まってきますが、それによって集団が安定してしまう。

アフガンを攻撃する直前のアメリカが丁度そういう状態でした。しかし、うっかり勝ってしまうとまた不安定になってしまうのです。また不安定になるから、やはりアフガンの次はイラクをやらなくてはならないということになってしまう。イラクがあまり上手いかなかったのもその次はなかなか仕掛けられないかも知れませんが、結局これはキリがないのです。本当は自分の中の葛藤なのですから、葛藤を外へ投影して戦っている時に安定する。戦っていないと安定しないわけで、次々に戦いを仕掛けてしまう。実はその戦いのエネルギーが、今の近代文明社会を活性化しているのです。実際に殺し合ってしまうと大変ですが、普通はそれを法律の範囲内で戦っているのです。例えば企業と企業の戦いのような形にすりかわっているわけです。あるいは個人と個人の法律の範囲内での戦いということでやっているわけです。

ですから今の近代文明社会というのは、先ほどエゴの追求ということを言いましたが、もう一つのポイントは戦いが基本になっている。その戦いの基本はシャドーのプロジェクションということになります。実はこれが社会の進化に非常に大きなポイントを持っており、近代文明社会の中心となる自我のレベルを「後期自我」と私は定義しました。後期自我とは何かと言うと、理性でもってきちんと自分をコント

ロールして立派な社会人が演じられるレベルを後期自我と言っています。今の社会というのは、後期自我に達している人が社会の上層部を占めています。これが先ほど言った鈴木宗男タイプになるわけです。非常に自分をきちんとコントロールして、普通は法律の範囲内でエゴを追求しています。時々法律から外れてしまう人が出てくるのですが、そういう人をどんどん作っているし、そういう人がリーダーになっている。

話が少し脱線しますがアメリカン・ドリームというものがあります。会社を興して億万長者になり、何十億、何百億というお金が入っている。私が今のロボットをやる前にコンピュータビジネスをしていましたので、アメリカのそういう連中と随分付き合っていました。何年か経って聞いてみると、非常に多くの人が精神的におかしくなっています。ベンチャーで上場すると物凄いお金が入ってくるわけです。シリコンバレーの辺りに物凄く大きな家を買って、そこにテニスコートもあればプールもあるし、美人の奥さんがいる。おまけに奥さん以外に2、3人のガールフレンドがいたりする。人目も羨むような暮らしをして、これもお金があるから、毎日ゴルフをしていればいい。あるいは大きなヨットを買ったりして遊んでいるのですが、何年か経つと鬱病になってしまう。そういう人が非常に多い。アメリカン・ドリームの末路というのは哀れです。物凄く稼いで、物凄く沢山持っているお金を全部精神科医に貢いでいる。アメリカの精神科医はとても高いですからね。いつも会社で言うのですが、それに較べると君たちは何て幸せなのだ。毎日遠い距離を満員電車で揺られて来て、安い給料で朝早くから夜遅くまで物凄い勢いでこき使われて、おまけにアホな上司にどつかれて、でもそうやって一生懸命やっている人の方がアメリカン・ドリームの成功者よりも随分幸せなのです。

なぜそれが起きてしまうのか、全く同じなのです。つまり戦っていないと生きていけないのです。後期自我の人というのは戦っていないと生きていけな

い。ですからみんな、もう引退すべき年頃になっても社長の椅子にしがみついているわけです。肩書きがないとまずいのです。社長の椅子を失ってしまうと、自らを死に向かって駆り立ててしまうのです。そういう人が非常に多い。私も役員を15年以上やっていた引退した役員をずっと見てきましたが、引退した途端に自分で自分のスイッチを切り始めてしまうのです。例外もいますが、大体がいわゆる悠々自適という生活をきちんとエンジョイ出来ない。今は違いますが前は会社の中に役員室があり、役員だけまとまっていて引退した役員の部屋もありました。顧問とか相談役とかいう名前がつき、これは普通の基準で考えるととても恵まれています。結構なお金があるし、秘書は付いているし、車は会社の車を使い放題だし、ゴルフ場の会員権もそのままキープされていて普通に考えれば物凄く恵まれています。ところがその人たちが何をやっているかというと、15年前に私が役員に成り立ての頃は非常に若い役員で、彼らから見ると話しやすいのですが、私の部屋に来て愚痴をこぼすのです。現執行部に対する批判をいろいろと言う。その頃の私は物凄く忙しくてもう勘弁してくれと思うのですが、愚痴をこぼしに来る。こうはなりたくないと思ったから色々とお本を書き出したのですが。

ですから先ほどのアメリカン・ドリーム成功者も、日本の成功者も大した違いはありません。それは結局、後期自我というレベルが戦っていないと安定しないレベルだからです。戦っていないと安定しないレベルが中心となり、そういう人たちが日本の社会、あるいはアメリカもヨーロッパもそうですが、社会の上層部にドドッというのが今の近代文明社会です。

お手元のレジュメを見ていただくと、「意識の成長・進化のサイクル」という図があります。これはケン・ウィルバーの本からとりました。この左肩が学問で言うとピアジェなどがずっと調べてきた発達心理学です。ケン・ウィルバーは少し言葉の使い方がお

かしくて、プレローマとかウロボロスとか変な言葉を一杯使います。プレローマというのは錬金術の言葉で混沌としているというような意味で、自分と外界があまり区別できないような状態です。ウロボロスは昔の神話の尻尾を銜えた蛇で、やはり外界と自分が閉じてしまっている。この頃はおっぱいと接触を通じて自分と外界との差を少しずつ感じ始める。次は身体自我ですが、この辺を解説しているとこれだけで2時間くらい経ってしまいますので省略します。そういう具合にどんどん発達して行って上の方に個というところがありますが、いわゆる自我の確立にいくわけです。自我の確立を超えると「超個」というレベルになり、この右側の半分は今までの学問では殆んど扱われていない領域であり、宗教が扱ってきた領域です。

ケン・ウィルバー自身も座禅を長年にわたって、熱心にやった人でありまして、トランス・パーソナル心理学の学者は大抵に瞑想等をやっている学者が多いのです。と言うのは、そういうことをやらないと右側の半分は理解出来ないということです。仏教で言うならば悟りに向かっていく方向性を持っています。その辺は秘教的イスラーム、秘教的キリスト教、秘教的ユダヤ教と言われていますが、いわゆるスーフィーなどです。そういうところが一神教では割合に解明していますし、キリスト教にはその辺の体験があまりないように見えるのですが、アビラのテレサが書いた『霊魂の城』という本にはその辺がかなりきちんと書かれています。人によっては、仏教やヒンズー教の言っていることとほとんど同じだと言う人もおられます。

話を自我の確立というところに戻しますと、そこに初期の自我、中期の自我、後期の自我というものがあります。初期の自我は、自分の要求を比較的行動に出してしまうレベルを言います。中期の自我は、いわゆるフロイトの言う超自我が出来てきて、ある程度の倫理観や自分をコントロールする力が付いてくる。但し中期自我の場合は、主として両親に



よる躰の範囲内にあります。超自我が両親の躰や大人の躰によって形成されていくというのが中期自我です。反抗期を経て、両親の束縛を断ち切って自分が独立した状態が後期自我です。今の日本社会で言うと、会社の中を見ても逆に後期自我まで達している人が少ないですね。何故か。結局、依存心が残っている間はやはり中期自我なのです。最近はかなり少なくなりましたが、かつては会社ベッタリの人が多かった。雪印や東京電力とか色々な問題が発生しましたが、会社のために全てを投げ打ち法律に違反してでもやってしまう。そういう会社ベッタリ人間は中期自我だと思っていただけばよいと思います。あるいは配偶者にベッタリの人というのは相当多いですし、新興宗教にベッタリ縋ってしまうのもこの中期自我です。こういう円があって、ここから上が肉体を持った。オギャーと産まれて最初は皆んな一生懸命に勢いよく登っていきます。個のところに行きグーッと登って行くのですが、大体の人はこの辺で落ちて死んでいくわけですね。ですから後期自我まで行った人というのは、かなり社会の成功者と思っていた方がよいかも知れません。逆に言うとそういう人はまだまだ少ないので、今の学校教育等はそこの後期自我に向かって教育しているわけです。ところが後期自我は、先ほど言ったように戦いの人生しか歩めない。シャドーのプロジェクションが非常に強く残っているのが後期自我です。今の社会は全部そうなっている。シャドーのプロジェクション、シャドーそのものをある程度統合したレベルを、その右にある成熟した自我という言い方をしています。

成熟した自我にいくと人間はこういうことになると、学問的にきちんと判っています。成熟した自我というのは、理想の人間のようなものとは全然違います。人格者に見える人はむしろ後期自我だと思った方がよいですね。人格者としてのペルソナをきちんと持っている人が人格者に見えるわけです。そういう人というのは、やはりシャドーを物凄く深く

持っています。成熟した自我は多分人格者に見えないと思います。もう少しグジャグジャに見える。要するに裸になってしまったという感じの人です。

時間がなくなってきたので少し端折りますが、これから世の中はどうなるのか、レジュメ「社会の進化」にその話があります。中世的社會、近代文明社會、この次に今から数十年で移行する社會を成熟した社會と私は名付けました。中世的社會というのは先ほど申し上げた宗教を中心とした社會です。社會の規範が宗教であり、宗教的神秘主義のようなものが一番の規範になっている。その時に中心となる意識レベルが中期自我であったであろう。これはケン・ウィルバーも、少し違う定義ですがそういう言い方をしています。ケン・ウィルバーは中心となる意識レベルの代わりに、社會における重心という言い方をしています。1500年くらいまでの社会的重心がこの中期自我だという言い方をしていますので、多分私の言っていることと殆んど同じだと思います。「文化的重心」という言い方をしていますね。私はそれを社會の中心となる意識レベルと呼び変えています。ケン・ウィルバーの文化的重心の定義は、その社會ではそのレベル以下の人はそのレベルに引き上げるような力学が働かし、そのレベル以上の人は引きずり降ろす力学が働く、それを文化的重心と呼んでいます。私が少し言葉を変えたのは、定義を全く変えたいと思ったからです。

私は社会的中心という言い方をして、その定義が4つあります。一番目は、その時代の指導層にそのレベルの人が沢山見られること。二番目は、その時代の特色にそのレベルの特徴が色濃く反映していること。三番目は、その社會の理想的人間像がそのレベルであること。四番目は、そのレベルまで成長する仕組みを社會が内在していること。ですから普通に社會生活をしているとそこまでは行けるということです。今の近代文明社會は後期自我が社會の中心なので、学校教育も全部後期自我を目指していますし、一生懸命に社會生活をしていると



何とか後期自我まで行って鈴木宗男のようになれるわけです。そういう具合に社会が出来ている。

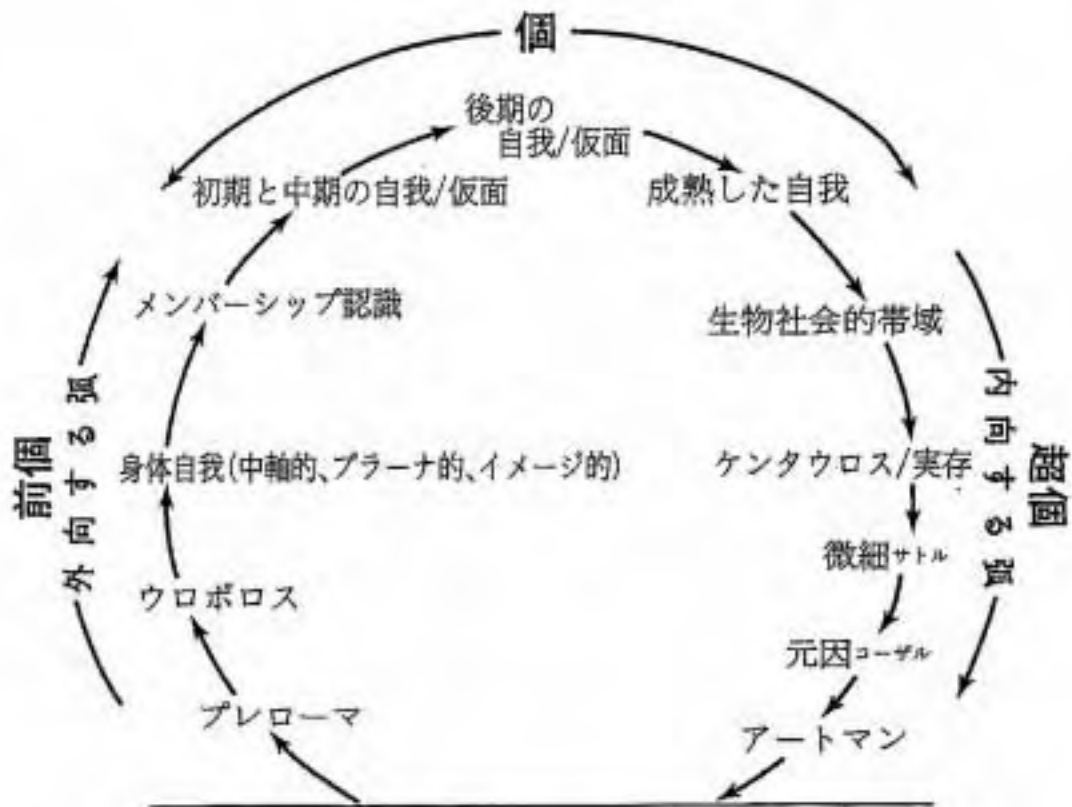
しかし今の社会で普通に活動していると、成熟した自我には行けないのです。そういうメカニズムが社会の中にはない。成熟した自我に行こうとすると、そこは逆に言うと宗教的な色々な修行法というもの、この右半分の意識の成長に助けになるわけです。あるいは色々な心理学的なセラピー手法でもって行くことが出来る。今日をご説明出来ませんが、レジュメ「意識の成長・進化の方法論」に、意識の成長・進化の方法論を纏めてあります。これはケン・ウィルバーの本の中から殆んどとっていますが、私も幾つか追加しています。例えばキリスト教の方ですと奉仕ということを非常に重視しますが、私は奉仕というものも非常に有効な修行法だと考えています。

中世的社会というのは必ずしも中世という意味ではなく、宗教が社会を抑圧的に支配している社会を中世的社会と呼んでいます。ですからいわゆるイスラームで支配しているアラブ諸国は、むしろ中世的社会であると考えた方が良いのではないかと。近代文明社会とは今我々がいる社会で、信教の自由が獲得されて理性が中心になり、科学的合理主義が中心になる。したがってエゴの暴走をしやすい社会である。その次の社会は何か。成熟した自我が中心になって、多分経済の成長は今よりはるかに低くなるだろう。しかしながら、人々がより元気になっていくだろう。今、社会は活性化しているのですが、会社の中を見ても人々が元気かというところでもないのです。みんな疲れています。それは競争に疲れてしまっているのです。それに対してその次の社会というのは、そういう社会生活よりも個人の意識の成長・進化というものがもう少し重要になってくる。その中心になるのが宗教性であるし、あるいは私の造語ですが深美意識という概念が中心になってくるのではないかと考えています。成熟した社会に関して説明する時間がなくなっ

てしまいましたが、一応時間になりましたので私の話はこの辺にしておきたいと思います。ご静聴有り難うございました。



講演資料「社会の進化と宗教性」 土井利忠氏



意識の成長・進化のサイクル

ケン・ウィルバー「アートマン・プロジェクト」(春秋社)より

社会の進化

「秩序の維持と進歩性」

名称	中世的社會	近代文明社會	成熟した社會	実存的社會	超越的社會
キャッチ・コピー	宗教社會	競争社會	平和で、みんな元気な社會	至福の社會	空の社會
社會の目的	宗教的秩序の維持	經濟・産業の成長	個人の意識の成長・進化	全体性との調和	なし
社會の規範	宗教的神秘主義	科学的合理主義	形而上的価値観	内なる至福感	なし
中心となる意識レベル	中期自我	後期自我	成熟した自我	ケンタウロス	アトマン
特徴	宗教による抑圧 専制的支配体制 交易や宗教の場 人口集中 農民のおおらかさ 変化が少くない 保守的傾向	信教の自由 民主主義 都市に人口集中 社會の活力は高い 激しい競争 争いが多い エゴの暴走 富と名譽の追求 ストレスが強い 人々は消耗 病氣、犯罪が多い 多数派による抑圧 社會生活が中心 左脳ビジネス 法律が複雑 投機的貨幣經濟	宗教の変容 深層民主主義 都市と田舎がバランス 經濟成長は低くなる 調和と許容が中心 紛争の減少 エゴの低下 多様性が許容される 装わない人々 人々はリラックス 人々の活力は高い 病氣、犯罪が減る ホロトロピック・セン ターが社會のへそにな る 社會生活と精神活動の バランス 右脳ビジネス 長老の存在 地域通貨の發展 PAH値がよい	宗教は死滅 ミニマムな政治 都市の過疎化 國家の希薄化 經濟の衰退 内なる喜び 紛争が激減 至福の人々 病氣、犯罪の激減 病院が消える 精神活動中心 自然農法による自 給自足 法律がミニマムに なる レジャー産業が衰 退 地球のエネルギ 循環にそった文明	國家の消滅 大いなる調和 大いなる至福 法律、裁判制度が 消える



意識の成長・進化の方法論

目的レベル	それぞれレベルの理論・セラピー	手法
成熟した自我	交流分析 リアリティ・セラピー 精神分析 サイコドラマ 自我心理学 フロイト心理学 バイオエナジェティクス アレキサンダーメソッド ロジャーズ派セラピー 実存分析 ロルフアイング ハタ・ヨーガ 氣功法 (静功、太極拳)	サイコセンセシス (アサジオリ) ホロトロピック・プレスワーク (グローブ) 各種瞑想法 (折り)
ケンタウロス	各種宗教的修行法 (禪、クンダリニ・ヨーガなど) ヴェーダーンタ 大乘仏教/金剛乗仏教 道教 秘教的イスラム教 秘教的キリスト教 秘教的ユダヤ教 クリシヤナムルティの哲学	奉仕 実存心理学 人間性心理学
アトマン (トランス・パーソナルな 帯域)		トランス・パーソナル心理学 ユング心理学

「日本人のイスラーム観— 一神教とは肌が合わないか」

東京大学名誉教授
板垣 雄三



ご紹介いただきました板垣です。今日は一神教学際研究センターがいよいよ活動を開始されるという記念の集まりに、お話をさせていただく機会を与えられて大変喜ばしく光栄に存じています。このセンターが同志社大学の中だけではなく、また日本だけではなく世界全体の中で非常に重要な役割を演じられるようになる、そういうことを心から期待するものです。今日は日本人のイスラーム観ということでお話しするのですが、私は東大を定年になってから、東京にある私立大学の東京経済大学でまた10年間教えました。その頃に、大教室での講義が終わった後で私に話しかけてきた男子学生がいました。彼の話をもっと聞いてみたいということになり、私の研究室に一緒に行って話をしました。その学生はアルバイトで深夜、東京の地下鉄建設工事で殆んど徹夜の仕事をしていたということが、話の中で分かってきました。彼は、その仕事の現場で一緒に働いているイラン人と夜の肉体労働をする中で、イラン人の生き様やものの考え方に非常に深い感銘を受けた。こういう人がムスリムなのだということで、ぜひイスラームを勉強してみなくてはいけないと感じている、ついてはどういうふうにやっていけば良いのかという相談をしに来たのです。そういう一人の人が存在している。その生き様というか、そのイラン人は彼にイスラームの話をしたわけではないようですが、しかしその人間の存在から発する何らかのメッセージを、日本人の学生は夜の労働の中で感じ受け止めたということだと思います。私のレジュメの1に、映画「サハラに舞う羽根」と書きました。

東京ではまさしく今上映されています。京都では上映されていないかも知れませんが、いずれご覧になる機会はあるだろうと思います。これは1880年代の19世紀、スーダンでマフディ反乱が起きてゴードン将軍がそこで戦死するという類の話で、ご存知の方も多いと思います。イギリス軍がアフリカのスーダンへ攻めて行って、スーダンにおけるムスリムの運動を武力で鎮圧し植民地にしていく。そういうスーダンでの戦争に参加したイギリスの若者たち、そしていよいよ出陣の直前に、アフリカへ攻めて行ってムスリムと戦うということに疑問を抱いて軍隊をやめた若い軍人が、恋人に弱虫とか卑怯者とか言われてふられてしまう。そういうところで軍人としてではなく、自分の友達の軍人たちの身の安全を守るために民間人としてスーダンに行くという話です。これは有名なイギリスの小説で既に何度も映画化されていますが、それがまた新しいフィルムになって今出ている。これが日本では「サハラに舞う羽根」という題でやっています。あまりこの話をしていると今日はこれだけで終わってしまう危険性があるので自重しなければいけません。この映画を作った人も見た人も、色々な意味を込めている。イラク戦争が始まるより前にこの映画は出来ていたわけですが、イラク戦争に十分関連する中身の映画です。この映画を見た日本人の何人かから私が言われたのは、その中で決して主人公ではない、主人公をサポートするようなワキの人で、その俳優は西アフリカの人でムスリムではない人だと思いますが、登場人物の名前はアブファトマという名で出てきます。



この人の飄々とした生き様というか、戦争の真っ只中でただやみくもに戦うわけでもなく人を殺すわけではない、そういう中で生き抜いていくムスリムの一人の姿、これが民間人として友達を救いにスーダンまで行ったイギリスの青年というものの心の展開・広がり、非常に重要な形で支えている。そういうことに気が付いた日本人は、映画を見た人の中に沢山いるということを聞きました。今私は最近のアメリカ社会の動きに大変がっかりしているのですが、アメリカで作った映画でもそういう見方が出来るような映画が出来ているということで、望みを捨てなくてもよいのではないかという気もしています。この映画の宣伝のために今日来たのではないのでこれぐらいにします。殊に9・11の事件以降、日本ではイスラーム＝テロリズムというような式で、何かイスラームというのは非常に剣呑で危険な、傍に近づくのも嫌な宗教のように見える、あるいはそう思わざるを得ないようにさせられるような報道などが満ち溢れています。しかし先ほど言ったような、深夜のアルバイトでイスラームを勉強しなければいけないと感じさせられるような、自分はムスリムだとか何とか言わないでいるワキのイラン人、それを見ていてそう思うような人や、それからアメリカが作り舞台はイギリスがスーダンを征服するような話の戦争映画の中からも、イスラームについて何かを感じ取るという人たちがいる。そういうところで、私は混乱する〈「一神教」＝「他者」〉意識とレジメの最初に書きましたが、我々の頭の中で何かスッキリしない、何か考えてみなければいけないと思うようなことが色々あるのではないかと考えています。

私自身はプロテスタントのキリスト教の家庭環境に育ち、教会学校、当時は日曜学校という言い方が普通だったかも知れませんが、そういうところも含めて日常的に色々な意味でキリスト教の中で育ってきたと思います。今から半世紀を過ぎるくらいの過去に、どうして中東やイスラームをやるようになったのかと、よく質問されます。何か非常にけったい

な珍しい人で、どうして昔にそのようなことを考えたのだろうかということでの質問で、そう聞かれることはよく分かるのですが、それを説明するとなるとまた1日や2日はかかるので縮めて言えば、アッラーの思し召しでしょうかというようなことで誤魔化しています。アッラーの思し召し等と言うと、貴方はムスリムですかと聞く日本人が圧倒的多数です。つまりキリスト教なりユダヤ教なりはヤハウエーやエホバという神様で、イスラームの神様はアッラーなのだという思い込みです。アラブというのはアラビア語で暮らしている人のことですが、アラブのユダヤ教徒もアラブのキリスト教徒にとっても神様はアッラーです。ちょうど英語でGod、日本語で神様と言うのと同じで、アラビア語では神様はAllahですので、別にムスリムだけの神様ではない。ユダヤ教徒もキリスト教徒もムスリムにとっても、神様はみな同じAllahなのです。何か神様も違う、同じ一神教と言っても非常に喧嘩ばかりするというので、違う宗教だというような思い込みでいる人が圧倒的に多いと思います。しかし同時に日本人の頭の中には、どこかでユダヤ教もキリスト教もイスラームも我々とは全然肌合いの違う人たちの宗教ではないかと。それら全部が一神教で、こういう我々の湿った風土の中のアミニズム的な宗教伝統の中にいる日本人は、そういう一神教とはどうも肌合いが合わない。こういうふうにしてバラバラに対立的に見るかと思うと、今度はユダヤ教もキリスト教もイスラームもみんな同じという格好で一括して、我々はそれとは付き合えないと見てしまう。こういうところで我々の頭の中が、それこそ混乱しているという面があるかと思っています。かつて私がいた職場の人たちによる連続講義の記録で、講談社から最近出た『一神教からの問いかけ』という本を見ると、日本人の頭の中の混乱に十分にこれで答えられるのかなと思ったりもしています。学習院女子大学の社会学の先生である桜井啓子さんはイラン研究をやっている人ですが、『日本のムスリム社会』という本を書きました。

これもごく最近出た本です。日本の中で暮らしているムスリム、多くはパキスタン、バングラデシュ、インドネシア、イランの人であったり、国籍で言えば何十カ国にまたがるような多様な国から来たムスリムたちが、日本の社会の中に今や定着しつつある。そしてまたその人たちの多くは男性なので、日本に来て日本人の女性と結婚しその子どもたちも成長し、その子どもたちの学校をどうするのかというような教育の問題が今や大きな問題になり始めているという、日本の中の様々なムスリムのコミュニティの問題を調べて書いた本です。こういうものを見ますと、もうイスラームを理解するとか何とかというような次元のことではないですね。結婚して所帯を持つということは、文明間対話などということでもない。もっと人間同士の深い付き合い、生涯の伴侶としてやっていくというような、そういうようなことが日本の中で今どんどん広がってきている。そういうところで一層、我々の一神教観の今ある混乱を考え直してみなければならぬのではないかと考えています。先ほど少し言いましたように私は子どもの頃キリスト教の中で育ちました。当時は東大の近くの本郷住んでにいましたが、駒込教会、現在の日本基督教団西片町教会に通いました。そういう場所にある教会だったものですから、東京大学の学生さんたちが日曜学校の先生をしていました。今でも非常にはっきりと記憶に残っているのですが、今考えてみても非常に偉い、大変なことを教えてくれたと思うのです。小学校の低学年の時に世界の白地図をつきつけられて、この地図の中でエルサレムはどこにあるのか書き込んでごらんとと言われても、大体この辺だろうと書けたらと思うのです。ナイル川はどの辺を流れていると言われても書けたと思います。ダマスカスという町はどうだと言われても、それ程びっくりしないでこの辺だと言えたのではないかと思います。そういう教育を受けました。しかも考えてみれば、聖書の国は今キリスト教よりはイスラームの国になっていて、ムスリムが沢山いる。そこ

で話されている言葉はアラビア語という言葉だというようなことも、小学校の低学年の時に教わりました。私はアラビア語の中身が何であるか知る由もありませんでしたがアラビア語という言葉があり、そしてそれはイエス様が生まれ、活動したという場所では現在そういう言葉が話されているのだというようなことを知っていたわけです。そういうことを教えてくれた人は、後で考えてみれば大学の地震研究所の地震学の先生になったり、昔の商工省のお役人になって高級官僚になった人も、そういう格好で学生の時代に私に教えてくれました。そんなことがあったのですが、後に私が中東やイスラームを勉強するようになったのは今言ったような背景があるからでは、全くありません。私は大学でイギリスの近代史をやっておりました。そこから自ずと繋がって、先ほどイギリスがスーダンに攻めて行ったというような話とも繋がるのですが、だんだんとイスラームを勉強しなくてはいけない、したいということになりました。考えてみれば自分はもう、例えば中東というような所は昔から知っていたのだということに思い至る。だから貴方はどうして勉強を始めたのですかと言われると、アッラーの思し召しでしょうということになります。

後に実際に中東に行くようになりますと、ヨルダン川の畔に立って、ここは自分は初めて来たけれど子どもの時から知っていた所だとか、それこそダマスカスの町をふらふら歩いていてここは何という通りかと思ってみると、そこにマッスムという通りとアラビア語で書いてある。この通りは自分は昔から知っていたのだという感じになりますので、シオニストというか、後からそういう土地に行ってここはそもそもユダヤ人の国であるという気持ちになって、これは我々の国だと主張する人の気持ちというのは、実は私は良く分かる気がします。初めて行っても自分は前から知っていた、ここは自分の土地だという感じですね。そういうことの恐ろしさもまた私は痛感しました。そういう意味で私は、混迷する〈一



神教」=「他者」>という、混迷する日本人全体の意識の中では幾分か違う立場でやっているかなというようなことは思います。しかし日本社会全体の問題として見ると、どうして日本人は一神教とは肌が合わないと感じてしまったり、しかし一人ひとりの人を見る、実際に人と付き合ってみるとまた全然違うことが考えられてくるという心の様々な向きを、今ここで改めて考え直してみなければいけないと思っています。日本人のイスラーム観と言いましたが、日本人のイスラーム観とは今言ったような日本社会の一般的な状況で言うと、それは殆んど日本人のキリスト教観と一緒にすることではないかとも思うのです。この大学もそうですが日本では明治以来、日本人の文化とか精神というものの中で、キリスト教に学ぶということやってきたことは非常に大きな意味を持っていたと思います。しかし今、日本のキリスト教はなぜ日本社会全体の中で1%くらいしかいないのかと自問するというようなことを見ても、やはり一神教=他者という日本人の中に一般にある混迷する意識という問題は、イスラームだけの問題だけではないと感じます。

レジュメ最後にある図の1、“A Map for Civilization Strategy” をご覧下さい。私は随分昔に文明戦略マップというものを作り、それを色々な時に使っているのですが、これがそれです。世界というものには色々な捉え方がある得るので、これでなければいけないなどということでは全くありませんが、一つの見方です。このサークルというのは歴史的世界というように考えていただいてもよいですが、人やモノや情報が3つに集散するという一つの地域的枠組みという意味です。ユーラシアサークルとインド洋サークルと地中海・アフリカサークルというものを私は考えています。それが三つ巴に全部重なっている、この3つのサークル・世界を全部持っているところが中東であろう。そして2つずつ重なっている部分を加えると、私は中東のextensionと言っていますが、それを全部組み合わせる

と三つ葉のクローバー状の図形が出てきます。それがイスラーム世界の歴史的なtagと考えてよいだろう。イスラーム世界というのは今や完全にグローバル化しており、アメリカ合衆国もヨーロッパもそこには沢山のムスリムがおります。したがって世界全体がイスラーム世界だということにもなるわけですが。イスラーム世界の歴史的なtagというのは、このクローバー状のこの部分というように考えています。次のものにしていただきたいのですが、これを少し立体的に見ると、手前に三つ巴のサークルがあり、その向こうに海を隔ててアメリカ大陸がある。裏番組というような意味ではありませんが、この図の上ではアメリカ大陸は裏世界というような格好になるかも知れません。この手前の三つ巴の世界から人間が移って来ました。昔は海峡ではありませんでしたが、今のベーリング海峡を渡ってモンゴロイドの人々がユーラシアから行き、そしてそれがアメリカのインディオとかインディアンと呼ばれる先住民を形成する。イベリア半島から人々が移っていく、ヨーロッパから行く、奴隷という形で非常に多数のアフリカ人が沢山アメリカ大陸に移って行く。そして最近太平洋考古学というものによって、太平洋を越えた人間の活動が昔からあったという痕跡も今や明らかになってきている。そういう意味で裏側のアメリカ大陸というものは、手前の三つ巴の世界を全部持っているわけです。中東とアメリカ大陸は非常に共通の性質を持っているというか、非常に親近性を持っているということが言えると思います。事実、今、中東の人は非常に伸び伸びとアメリカ大陸で活動出来ますし、アメリカ大陸の人は中東に来て非常に気楽にそこで暮らし活動することが出来る。イラクに攻めて行ったりというようなことでなくても、もっと普通の形でアメリカ大陸と中東は繋がり合っているわけです。但し中東というのは、先ほどの歴史的な世界の中で否応なくそこに全てが集まっているという意味での中心性を持っている。これはいわば先天的というか、運命的というか、生得的とい

うか、生まれつき中心的な位置というものを押し付けられてしまっているというか、そういう運命にある。それに対してアメリカ大陸の方はいわば後天的、獲得的に世界の中心性という、そこに世界が凝集しているという意味での中心性を持つようになってきた。ですから最近ではグローバリズムと言うと、アメリカ大陸の中でまた一つの核を成しているアメリカ合衆国が主導するグローバリズムという話ばかりに今人々は目を奪われていますが、本来のグローバリズムの本家というものはこちらにあったわけです。言ってみれば、今のグローバリズムは後から生まれてきたグローバリズムだということになります。前のところに戻ります。問題の日本ですが、日本はユーラシアサークルとインド洋サークルの外側の交点にあると考えることが出来ます。そう考えてみると、西ヨーロッパはユーラシアサークルと地中海・アフリカサークルの外側の交点になり、日本と西欧は非常に対称的なシンメトリカルな位置にあると言えます。色々な意味で、社会発展の面でも日本と西欧は共通しているところがあります。例えば日本の封建制と西欧の封建制は、議論すれば色々根本的に違う点は幾らでも言えるのですが、しかし封建制ということが問題になるとか、農村から資本主義が起こってくるとか、大量生産型のしかも非常に軍事化された資本主義が西欧でも日本でも起こってくるとか、長子相続というように長男が家を継ぐというようなことも、辺境の西欧と日本の非常に特徴的なところ。それ以外のところはそういう制度はあまりありません。財産は子どもたちみんなの間で分けるということの方が普通です。日本でも同じようなことになるのですが、ここで起こってきた大量生産型でしかも軍事化された資本主義、産業資本主義というもの、これこそが資本主義であり他の社会もみんなそうになっていかなくはない、それが近代化なのだという考え方で説明するという独善というか自己中心的なものの見方も、日本はこちら側に引きずられてではありますが、イスラーム世界の歴

史的なtagの一番端の非常に特殊な辺境のところ、で顕著に見られることだと思います。

これは今言ったことに関係するのですが、我々はもうすっかりヨーロッパ中心主義の教育の毒が全身に回っており、西欧の歴史が自分の歴史のような積りになってものを考えている面が、日本社会全体としてどこかにあるわけです。西欧から近代が起こってきたと、しかし実際にはイスラームのアーバニズムとか都市的な生き方とかモダンティー・近代性というようなものが、地続きのヨーロッパにヨーロッパ的に展開した。それがヨーロッパの近代です。これを一繋がり結び付けて理解しなければいけないものであるのに、世界はここで区切りがあり、ヨーロッパとそれ以外、ヨーロッパとヨーロッパ以外という格好で、全てここから物事が始まりここから世界に広がっていったという話に全部なっています。日本の社会科学は殊にその毒が十分に効きすぎた状態にあり、日本の大学ばかりでなく幼稚園から小学校から、至る所で全てヨーロッパ中心主義で教育されている。そういうふうには答えないと入学試験も通らないし、入社試験も通らないということにもなっていると思います。ヨーロッパはそういう意味でもろにイスラーム世界と地続きであり、ここでの都市的な生き方、都市文明、近代性を受け止めるということがあったために、今度は非常にアグレッシブに元祖・ご本家に対する抵抗が起こってくる。したがってヨーロッパにとってイスラームは敵だということになる。しかし根本的に自分の出処・オリジンを考えていくと、これを切り離しては考えられないというところで、非常に慕わしさというかこちらに対する憧れのようなものが一方では非常に強い。それだけに敵対する。相手を馬鹿にする。相手に対して攻撃を仕掛ける。これは最近亡くなったエドワード・サイードという人が書いた『オリエンタリズム』という、ヨーロッパの対東洋観の歪みです。そういうところでのambivalenceというか、好きだから嫌い、偉いと思うから馬鹿にするとか、頭が上らないから攻撃するとか、慕わしくて仕方ないから撥ねのけ



るというような関係がここで起こってきた。しかもイスラームのアーバニズムとモダニティーは、中国やインド、東南アジア等にもネットワークが広がっていき、我々は中国というと儒教文明、インドというとヒンドゥー教文明と色分けして理解していますが、中国の宋、元、明というような時代に展開してきた新しい儒学・儒教のイデオロギーはイスラームの思想との関係を抜きにしては説明が付きません。中国の都市とか揚子江南の華南の開発等も、イスラーム的なネットワークの展開を抜きにして考えることは出来ない。インドの文明も、イスラームというのは外在・外来のもので、インドから外して考えなければインドを理解出来ないという形でインド学のようなものがありますが、これも非常に大きな見落としをしている。今日、例えばインド料理のレストランに行って、そこで感じる雰囲気、聞こえてくる音楽、食べているもの、食べ方、色々なものがこちら側のネットワークの結び付きを抜きにして説明出来ないわけです。こういうふうな動きを受け止めたのが日本の近代です。原料やマーケットを武力で押さえ、画一的なプランテーションとか大量生産型産業主義という非常に軍事化された格好で、同じものを沢山作って押し付けるような西欧と日本の共通性というところで、イギリスの軍事史の先生が、西欧で起こったmilitary revolutionというものが実際に一番最初に実験されたのは日本であると。織田信長の小銃の非常に効率的な精射というか、火縄銃なので一発撃つと次を撃つまで時間が掛かる、それを何列も交代してどんどん切れ目なしに撃つというような戦術は日本で実験された。そういう格好で西欧のmilitary revolutionは日本で最初に実験の成功をみたというようなことが議論されています。こういう繋がり合っている両端なのですが、しかしこちらは色々な意味でイスラームのアーバニズムやモダニティーがネットワークを広げてくる。その受け止め方がこちら側と非常に違うということになっています。

お手許のレジュメ3-5の下をご覧ください。イスラ

ームと西欧と中国と日本というのを四辺形になるような形で示した図です。日本社会が中国に対して感じている感じ方、これと非常に近い形で西欧のイスラーム観があるわけです。考えてみれば何もかも、我々が使っている文字からして中華文明のお陰を蒙っているわけですが、そこでの日本文明は中国に対して一方で非常に憧れを持っているけれども、他方では中国と違うのだというようなことを一生懸命に頑張ってきた。それと同じことがヨーロッパで起こっているわけです。せいぜい18世紀後半くらいからのことですが、今、我々欧米が断然世界の中心にあるのだというようなヨーロッパの頑張りが、先ほど毒が回ったと言いましたが、そのように思い込んでしまう状況が生まれてくる。それは本当に長い人類の歴史で言えば、うたかたのように短いところの話なのです。そういうヨーロッパの頑張りは、この2項対立型の2分法によって成り立ったわけです。レジュメ3-1に戻りますが、ここに十字軍等も書きました。2つの世界論という考え方によって十字軍というものが成り立ったのですが、これはレ・コンキスタとか大航海にまで繋がってきます。エルサレムをめざす武装巡礼、アンダルスをイベリア半島を取り返す、返すということがまた色々問題がありますが、取り返すというレ・コンキスタ、そしてイスラーム世界を外回りから包囲する大包囲戦略としての大航海、こういうような形で2つの世界があり、こちら側がこういうふうにして相手を攻撃するということです。これが今日のパレスチナ問題までずっと繋がっていくわけです。ここに欧米からの人々を植民者として入植させて、そして楔として打ち込みイスラエルという国を作り、パレスチナ問題を操縦するというようなことがずっと繋がっていくのです。キリスト教とイスラームの対立というような話や、2000年にわたる血で血を洗う宗教的・民族的対立などという話がありますが、歴史を虚心坦懐に見ればどちらが攻撃し、どちらがそれに苦しみながら対応しているのかということが浮かび上がってきます。そのようなことが

あった16、7世紀の後、今度は東方問題というものが起こってきます。オスマン帝国の中にヨーロッパの国々が干渉して、この中では様々な宗教の人々が一緒に暮らしていた。このウンマというのがムスリムのコミュニティで、ミッレとABCDEENはオスマン帝国の中にいたユダヤ教徒であったり、ギリシャ正教徒であったり、カトリックのマロン派のキリスト教徒であったり、シリア正教徒であったりというような人たちが、ここで安全と公正securityとjusticeを基準にして社会契約を結んでいた仕組みを、紛争・干渉によって変えさせていく。ある特定の宗派・宗教の人々に武器を与え、資金を与え、軍事訓練を施し、学校を建ててやり、病院を作ってやりというふうにして、そして他のグループとは喧嘩しろと。喧嘩を外側から扇動する。こういうものが18、9世紀のヨーロッパ外交史として言われる東方問題です。こういうようなやりとりの中でヨーロッパの諸国が相互に同盟を結んだり、お互いに戦争したりというのがいわゆるヨーロッパの国際政治史です。舞台となった所はそっこのけで気にしないことにして、ヨーロッパの中でどういう条約が結ばれたとかいう話だけで成り立っている国際政治史もまた、ヨーロッパ中心主義の毒が行くところまで行っているということです。今、世界中でなぜムスリムがいる所で紛争が起きるのか、なぜムスリムは戦争が好きなのだろう、彼らの心根が曲がっているからこんなにして争いばかりが起こっているのだという話は、こういう歴史的な背景から考えてみると、その土地の中の人々の心根の問題で今の民族紛争や宗教戦争が説明出来るわけではないということがはっきりしてくると思います。

そこで日本の問題です。先ほどから強調しているようにヨーロッパ中心主義が問題なのですが、このようなものが我々の頭の中にさっと入ってしまった。その原因・背景は、日本自体のオリエンタリズムというものがあったからです。私の説明で少し飛ばしましたので分かり難いかも知れませんが、イスラームのアーバニズムやモダニティーと言われるけれ

ど、イスラームとはそのようなものではないのではないかと、先ずそこに根本的に疑問をお持ちの方が多いたと思います。私は先ほどの土井さんのお話を非常に面白く伺って、あの話のコンテキストでもっと議論をしていけばよいと思いながら、今はそれを諦めて自分の言いたいことを言っております。土井さんのお話の中で使われている概念と同じような言葉を、私はまた違う意味で使いますので、皆さんの頭の中で混乱が起きないことを願っています。ここばかりではなく、どこかでものを喋る時には、聞いてくださる人の頭の中を掻き混ぜるといふか、わけが分からなくさせるというか、自分が今まで考えてきたことが果たしてそれで良かったのかどうか分からなくなれば、それで私の方は大成功というつもりでものを言っておりますので、話が混乱するかも知れません。私は、イスラーム文明が出てきたところから近代だと思っています。土井さんのお話にあった近代的な合理性というようなものは、実はイスラームから出てきている。ですから、7世紀から近代だということを私は言っているわけです。それが今、この問題なのであり、欧米の文明が行くところまで行って行き詰まり、それでどうなるのか、ポスト・モダンというような話は、私の考えでは少しおかしい。実は7世紀からの近代の行き詰まりというものに、我々は今直面している。私はイスラームが何かの解決になるというふうには全然思っていないのですが、しかしイスラームの中からもしかしたら新しいスーパー・モダンのようなものがあるかも知れないということを、最後に言って終わりにしたいのです。ともかく、我々はイスラームを非常に偏見をもって見る癖を、それこそ毒を盛られて植えつけられてしまっております。ムスリムあるいはイスラーム文明の中で、如何に徹底した個人主義、合理主義、普遍主義が出てきているか、そしてイスラームは人間を徹底的に近代的な、それは都市的なということでもあるのですが、そういうものにするものかということも少し考え直して見ていただきたい。最初から



イスラームは近代に反するもの、あるいは近代以前のものというような見方、これは先ほどから言っているヨーロッパ型オリエンタリズムのごく普通の常識ですが、それを見直していただきたい。そこで、それが我々の頭の中にさっと入ってしまったのはなぜか。それがレジュメ3-3に書いてあるものです。日本自体のオリエンタリズムというものがあつた。日本の伝統的な対外意識は、三国意識という形で示されます。伝統的な日本社会の、あるいは日本という国が7世紀に生まれてきた後の日本人の世界ヴィジョンは、本朝・日本と唐・中国と天竺・インドという3つに世界を分けて理解するという見方です。しかもその中で、日本の歴史を通じて、『源氏物語』や『神皇正統記』等も引合いに出しましたが、ともかく我々は如何に中国と違うか、如何にインドと違うか、如何に日本は日本独自かという、いわば自分探し、日本のアイデンティティーというものを必死になって探してきた。こういう中で本地垂迹説とか根本枝葉花実説ということで、日本の神は仏陀、菩薩なりが大本の天竺から日本に顕れてきた、そのmanifestationが日本の神だというような考え方をしてみたり、果ては日本こそが根本であり中国は枝や葉で、インドは花や実であるというような形で日本中心の神ながらの道というようなものを構想する。こういう道筋の中で国学、やまとごころ・みくにぶりというものも出てくるわけで、必死になって中国と違う日本、インドと違う日本、アジアではない日本というものを日本の社会は一生懸命に探してきたのです。にも拘らず、日本はアジアだからとか、アジアの一国として我々はとかいうことを気軽に言ったりもしているわけで、そこが近代の問題でもあります。その手前のところに南蛮・紅毛の南蛮キリシタンの16世紀の話を書きました。先ほどのイスラーム世界を外側から包囲するという結果の一つとして、16世紀に日本に南蛮キリシタン文化がやってくるわけです。それが西欧との出会いだというように考えられてしまっています。しかし実際には、その半世紀前までイベ

リア半島はイスラーム世界でした。日本の社会は、キリスト教自体の理解もそこで何か大きな間違いをしたのではないかと思います。それを一層裏付けるような形で、19世紀の欧米オリエンタリズムの輸入になっていきます。脱亜入欧かアジア主義かというのは非常に対立した考え方のように見られていて、近代・現代をも含めて日本の社会的・政治的な思想の流れの中で、アジアにつくのかヨーロッパにつくのかという選択肢の中で日本人はものを考えてきたと言われていますが、実はこれは一枚のコインの裏表です。先ほどから言っている2項対立、世界を2つに分けてみる2つの世界論の適用にしか過ぎません。したがってアジアにつくのが、ヨーロッパにつくのが、ヨーロッパのクラブに入会しようが、そこでアジアの盟主がアジアを侵略するということにもなったわけです。自称アジア通アジア人のアジア離れのアジア支配というようなことで、日本の近代が成り立ってきた。そういう不思議な格好で、日本の伝統的なオリエンタリズムが19世紀以降ヨーロッパのオリエンタリズムに上手く適合し、さっとヨーロッパの2分法、ヨーロッパの2項対立はユダヤ人と異邦人というわけ方や、心と身体、霊と肉、物質と精神と7ページに書き並べたような格好で2分方でいくわけですが、このようなものに適応して、日本はアジアでもあればアジアでもなく、欧米でもあれば欧米でもないというようなところで、最初にいったような一神教に対しても我々は頭の中が混乱しているということがあつたわけです。

レジュメ4をさつとご説明して終わりにしたいと思います。パラレルイズムのところで私が言いたいのは、我々の頭の中の混乱しているものを整理しなおしてみる一つの方法です。7世紀から近代だと言いましたが、日本の歴史というものは近代史そのものです。7世紀初めに日本の国家が成立する。それと同時にイスラームの国も生まれてきた。聖徳太子と預言者ムハンマドは全く同時代人です。聖徳太子の歴史的事実性は最近色々な形で問題になっています

が、今はその問題は柵に上げることにします。普通言われていることと言えば、聖徳太子の亡くなった年はヒジュラの年ですので、不思議な形で預言者ムハンマドと聖徳太子は同時代人です。日本の国家は和の国として、それをスローガンに掲げて成立しました。それは色々な日本古来の宗教性の上に儒教やら、道教やら、仏教やらをどんどん受け入れていき、後にはキリシタンも入ってくるわけですが、そういうところで和が強調される。それとイスラームのサラーム、これも平和ですが、非常にある種の平行的な関係を考えるわけです。その下に色々書き並べましたが、日本人の非常に豊かな宗教性というものの伝統・歴史の中で考えてみると、例えば清貧とか隠遁とかいうところで展開する遊行聖とか、一体宗純でも良寛でもよいのですが、そういう人々の姿はイスラームでスーフィーと言われているような修行者たちと色々な形で重なって見えてくる場所がある。色々な意味で並行現象があることに気付いてきます。そこで私は日本社会のイスラーム認識における方向転換を提案しております。イスラームは知らない、関係ない、なじめないと皆んな気楽に言っています。日本の中で非常に立派な尊敬すべき偉い大知識人というような人に限って、私はイスラームのことは知りませんのと、如何にも汚らしいものには触れないというような感じで、自分が知らないということを正直に言っている。それが学問的にも良心的だというスタイルで言われるということがよくあるわけです。そういう人に、私は欧米のことは良く分かっているのだという気持ちがどこかにあるとすれば、実はイスラームのことが分からないで欧米が分かるはずは全くないのです。言葉の断片ですが、この頃アルゴリズム等という言葉が盛んですが、そういうものも、ヨーロッパをヨーロッパだけで切り離して考えていたら分からないことなのです。イスラームとの関係を抜きにしてはヨーロッパは分からない。そういうところで、知識人としての良心というのは非常に問題があります。ともかく知らな

い、関係ない、なじめないとか、問題の立て方として汎神論対一神教とか、アニミズム対啓示宗教とかいうような対立項を立てて我々がイスラームと違う、あるいはキリスト教とすら違うという考え方をしている。頭を切り替えて、和とサラームというところにある諸宗教の共生という姿を考え直してみる。日本の場合にはこれは著しく生活現象です。我々の暮らしの中に、あるいは個人の暮らしの中に色々な宗教が入っている。そういう生活現象としての諸宗教共生が日本の姿だとすると、イスラームの方は安全保障契約という、安全と公正ということで色々な違う宗教の人々が一緒に都市的に住み合わさなければいけないという、その体制をどうやって作っていくかということを生懸命に考え続けてきた。そういうイスラームの姿と、確かに現われ方が非常に違う、向きが違っているということがありますが、しかしそこで何らかの文明対話の思想を内蔵化している、内に置いているということが言えるようにも思います。更に挑戦的に私が最近色々言っておりますのは、イスラームにおいて例えばクルアーン(コーラン)を読みますと、神のしるしというものが宇宙に満ち溢れている、山を見ても、川を見ても、空を動く雲を見ても、帆をあげて動いていく船を見ても、地震が起きても、ナツメヤシの実がたわわに実っている姿を見ても、羊がお産しても、ともかく宇宙の中のあらゆる現象をじっと見るとそこに神のしるしが示されているということが、クルアーンの中に初めから終わりまで強調されているわけです。これは我々の「やおよろずのカミ」とどこが違うのか。そういうことを考え直してみる必要がある。日本人のかなり多くの方は、私は無宗教ですからなどと言いますが、簡単に宗教にはつかない、神などということにいかないという日本人の無宗教というものをよくよく考えてみると、それと見合う格好でムスリムも、イスラームの立場とは何かと言えば、これは必ずしも私だけが言っているわけではありませんが、イスラームというのは条件付き無神論であると。イスラームとは



宇宙の中には神はないということを徹底的に強調し、そのことにしっかりと拘って生きていくということです。いわば闇夜に頭を殴られるような格好で、神からのしるしが突き付けられる。そのことに気付く。そういうところでイスラームという宗教は成り立ってくるわけです。ですから日本人の無宗教というのは、イスラームの条件付き無神論ともしかしたらどこかで火花を散らして分かり合うというようなことが起こってくるかも知れないと思っています。

レジュメ5-2に、たくさんのホロコースト、たくさんの9・11を認識することと書きましたが、それに触れます。ホロコーストの結果、ユダヤ人に対する償いとしてイスラエル国家というものが生まれてくる。これはしかし、ホロコーストが起きたヨーロッパの人々の自らの痛みにおいての償いではない。パレスチナ人という別の犠牲者を仕立てて償いをするという、そういう償いでイスラエル国家が生まれてくる。イスラエル国家とは、植民地の時代が終わった世界の中で、そこで存在しているある新しい特殊な植民地主義です。ポストコロニアル・コロニアリズムを国際的に支えている。今、イスラエルも自重してもらわなければ困るけれども、パレスチナ人が先ず自爆テロをやめるべきだという格好で、どっちもどっち、紛争だとして物事を見ている。そして紛争の両当事者が譲り合わなければいけないと一生懸命に説教しながら、しかも目はパレスチナ人の方に向けて、貴方がたが先ずテロを止めなさいと盛んに言っているのが世界の現状だと思います。こういう国際的連携構造です。ちょうど日本が1930年代に満州国というものを作った。それに対して抵抗する中国の民衆に対して、満州国というものはあるのだから、したがって貴方がたは満州国と話し合いをしなさい、貴方がた匪賊や馬賊は止めなさいということを説教しているという、同じことが今、繰り返されているわけです。そういう形のホロコーストから繋がってくるこの連環と、ちょうどその複製として9・11があり、そして反テロ戦争体制というものが生まれてき

た。そして今度は世界のどこでも革命等というものはもう考えられなくなっているというところで、いや、変って、体制変革をやってやろうという人たちが今、アメリカから出てきている。そういうものが、ちょうど国際的連携構造の複製としてのユニラテラリズムをやっている。右側は左側の連環の全くのコピーです。しかもホロコーストこそ、これこそ人類のもう他にない特別の経験だと、9・11で世界は変わったというような形で、非常に普遍性というものをいわば独占する。それに対して、いや、沢山のホロコーストがあるではないか、例えば日本にもヒロシマやナガサキがある、そういう沢山のホロコーストがあり、沢山の9・11があるではないかという、多と1を結びつける論理がイスラームのタウヒードという考え方です。おそらくこれがあるから、今イスラームは悪者になっている。あるいはそれはムスリムだけの問題ではないと思いますが、そういう独占的・排他的な普遍主義に対する非常に根本的な批判者というところに、今、駄目になっているイスラームが将来このタウヒードという精神を本当に発達させ、我々がそのことを助け協力することが出来れば、世界は新しい超自我の世界にまで踏み込んでいくような展開が出来るかなというようにも思います。レジュメ6にあげた若林さんの『聖像画論争とイスラーム』の本はここに持ってまいりましたが、今、アイコンと言うと何か全然違うパソコン上のアイコンばかりですが、キリスト教の中で聖像画・アイコンを巡っての論争が起きた。それがムスリムの中とどういう関係を持っていたか、あるいはアラブのキリスト教徒の中でそのことがどう議論されたかということを書いた本です。若林さんは外務省のアラビストですが、この本を出した時にはどういわけか山梨県警察の警務部長をされており、この本の後ろの肩書きは山梨県警警務部長という恐ろしい肩書きでこの本が書かれたことになっています。彼は現在テヘランに駐在しています。最後に書いたように、我々は東方キリスト教のようなものに対しても目を向ける必要があると思います。シリア正

教とか、アルメニア正教とか、コプト教会など東方のキリスト教、つまりキリスト教が起こってきた土地のキリスト教ですね。そういう所のキリスト教はイスラームと同じです。イスラームは、イエスはイスラームの預言者の一人であると考えている。キリスト単性論派の諸教会はキリストの性質は一つだと言う。神と考えるとしても、性質は一つであると。3つのペルソナが1つの神に備わっているとか言うのではなく、3=1ではなく1は1であると。この点では東方のキリスト教徒はイスラームと全く同じです。ムスリムも預言者イエスの誕生祭というクリスマスを祝っているわけですし、マリアは人類の中でもっとも祝福された女性だというようなことも言っています。エルサレムの聖墳墓教会の鍵も持っていて、その教会をずっと維持し守ってきたのはムスリムですし、エジプトにやってきたイエスを連れ戻したマリアが洗濯物を干したのではないかという木を、きちんと守ってきたのもムスリムです。何かそういうところでの人々の共生は、文明間対話とか和解などというものではない。もっと深いところでの人間的な相互信頼、共生というものの姿を我々は見落とし、十字軍の思想、そして反ユダヤ主義の思想に染まり、2項対立論というものに毒され、そしてヨーロッパ中心主義という世界をヨーロッパとそれ以外として見るという毒が、今、我々の一番大きな問題になっていると思います。こういうことで、なかなか解毒にはならないと思いますが、むしろもっと毒が進んでしまうかも知れませんが、ご静聴有り難うございました。



同志社大学一神教学際研究センター設立記念講演会「日本の精神性と一神教世界」
2003, 10, 11 同志社大学今出川キャンパス明德館21番教室

日本人のイスラーム観 —〈一神教〉とは肌が合わないか—

板垣 雄三

1. 混迷する〈「一神教」=「他者」〉意識

映画「サハラに舞う羽根」**The Four Feathers, 2002.**

宮本久雄・大貫隆(編)『一神教からの問いかけ』講談社、2003.

桜井啓子『日本のムスリム社会』筑摩書房(ちくま新書)、2003.

科学主義／進化論／マルクス主義／オウム事件

憲法20条(靖国神社問題／中島尚志『日本核武装』はまの出版、2003.)

実際を見ること、人とつき合うこと

遠藤周作『死海のほとり』新潮社、1980.

2. 日本(社会・文明)の文明戦略的位置

中心性／グローバリズム 中東(生得的)—アメリカ大陸(獲得的)

対称性をもつ特異な辺境 西欧—日本

イスラームのネットワークとのかかわり

それからくるambivalence

3. オリエンタリズム

3-1

エドワード・サイード『オリエンタリズム』平凡社ライブラリー

二項対立型の二分法 反ユダヤ主義／十字軍 「二つの世界」論

ユダヤ人vs異邦人(非ユダヤ人)／こころvs身体／霊vs肉／物質vs精神／現世vs来

世／政治vs宗教／国家vs教会／宗教vs科学／信仰vs行為／人間vs自然／自己

(自我)vs他者／全体vs部分／公vs私／ヨーロッパvs非ヨーロッパ(アジア)

3-2

ヨーロッパ中心主義

世界史理解の構図(近代性モダニティーのとらえ方、西欧が本家?)

イスラームのアーバニズム(都市を生きる生き方、都市性)とモダニティー

イスラーム文明の展開としてのヨーロッパ近代

イスラーム世界はなぜヨーロッパの覇権に屈したか

3-3

日本のオリエンタリズム

三国意識(本朝／唐[唐土・震旦]／天竺)

唐土には顕れても忍びても乱りがわしきこと多かりけり、日本にはさらにご覧じる
ところなし(源氏物語薄雲巻)

天祖より以来、継体たがわずしてただ一種ましますこと、天竺にも其類なし(神
皇正統記)

本地垂迹説から根本枝葉花実説へ

国学、「やまとごころ・みくにぶり」

廃仏毀釈、津田左右吉『シナ思想と日本』

3-4

三国プラス西洋(南蛮・紅毛)

南蛮キリシタン文化のとらえ方

3-5

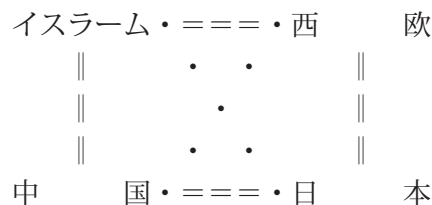
三国意識(本朝・唐・天竺という世界像)から欧米オリエンタリズムの受容へ

脱亜入欧かアジア主義か 一枚のコインの裏表

福沢諭吉と樽井藤吉、アジアの盟主／侵略・植民地支配

自称アジア通アジア人のアジア離れのアジア支配

欧米への親近感とアジア・アフリカへの蔑視・軽視



4. パラレリズムからの視点

並行現象 日本—イスラーム

聖徳太子—預言者ムハンマド

和—サラーム

清浄[禊ぎ・斎戒沐浴ムタハーラ]

唱名・念仏—ズィクル

禪定／和敬静寂—タサウフ(スーフィズム)

天皇+将軍—ハリーファ(カリフ)+スルターン

日本社会のイスラーム認識における方向転換

現状 知らない・関係ない・なじめない

問題の立て方 汎神論vs一神教／アニミズムvs啓示宗教



- 提案 ■和—サラームという諸宗教共生
文明対話の思想(生活現象か／安全保障契約の法体制か)
■やおよろずのカミー—神のみしるし
■「無宗教」—条件付き「無神論」

5. タウヒードについて考える

5-1

一つにすること、1と数えること、多即一、多元主義的普遍主義、一神教
ウンマ(共同体)、シャリーア(法)との関連

■多と一

万有の多様性・個別性・差異性・対等性 アーヤ(徴、神のみしるし)
神 条件つき無神論、sh-h-d
創造 個的存在が関係性のなかで関係性とともに創造される

■関係性

多元的思考 二分法への批判
宇宙的・環境生態論的視野 科学、アマーナ、ハリーフア
ネットワークないしネットワークキング志向
アイデンティティー複合

■共同性

ウンマ<ウマム、ミッラ<ミラル 「イスラーム」、フィトラ(本性)
家族、族的結合
経済活動 営利、ムシャーラカ
社会契約 安全保障、イマーマ

■公共性

自由と必然 終末に向かったの責任・応答性、ジハード、リバー禁止
知識 イルム、マアリファ、ヒクマ
価値と法 「神の法」の解釈と適用、公正・公益、信託、ワクフ
都市

■論理としての汎用性 墮落・逸脱・彷徨の自己批判

5-2

たくさんのホロコースト、たくさんの9. 11を認識すること。

ホロコースト／9. 11の排他的・独占的「普遍化」でなく

ホロコースト=====9. 11

イスラエル国家=====反テロ戦争体制

ポストコロニアル・コロニアリズム===「革命」の収奪横領

国際的連携構造=====ユニラテラリズム



6. 宗教間対話で完結するか？

若林啓史『聖像画論争とイスラーム』知泉書館、2003.

聖像画破壊運動(イコノクラスム) 726頃-787、814-843

レオン3世(在位717-741) 北シリア生まれ、サラケノスの思考をもつ
ダマスクスのヨハネ『知識の泉』743以後？

『聖像画破壊論者に対する反駁』726-730 崇拜と崇敬

サラケノスの思考をもつイコン崇拜者、と非難される

アブー・ケッラ(ハッラーン主教)『聖像画崇敬論』815頃？

聖アントニオスの殉教799

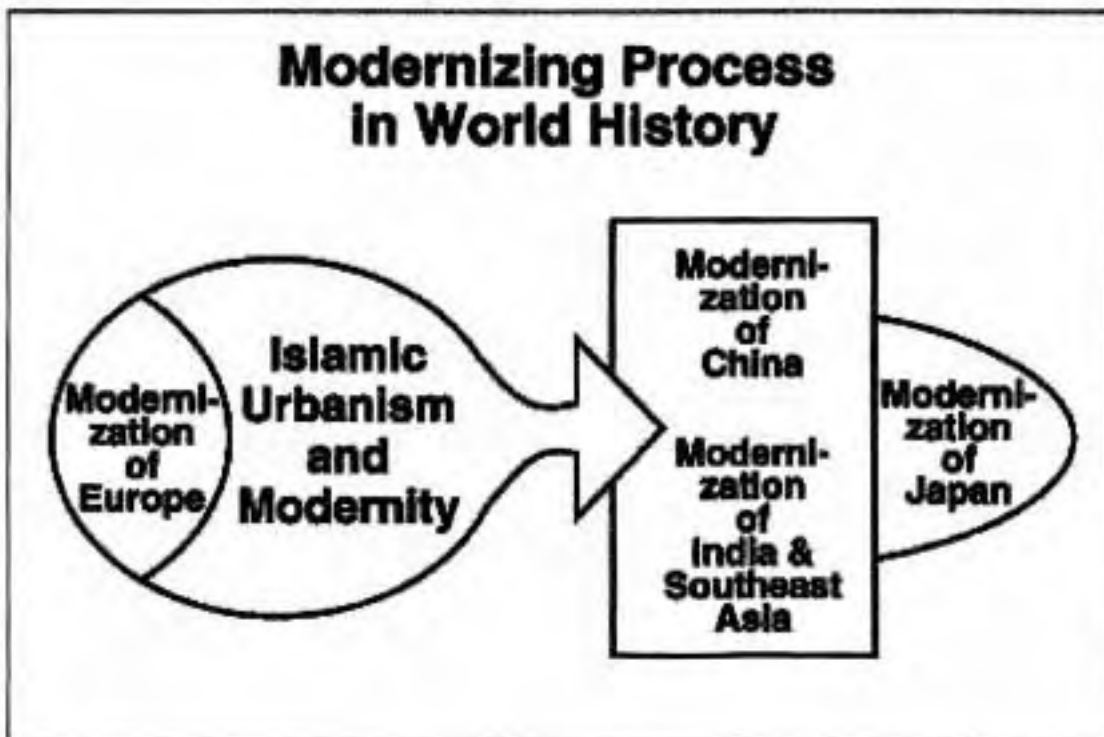
アラビア語のちから アラビア語によるキリスト教の概念操作が可能となる
教義論争・宗教間対話・言説共同体の形成 ムウタズィラ学派の発展を促す
東方キリスト教への観点
私のささやかな経験・観察から



1



2



© Yuzo ITAGAKI